

【原 著】

幼稚園 4 歳児学級における草花を使った遊びの展開に見る
教師の役割

横田 咲樹 西村（中川）華那 片山 美香 高橋 敏之

The Role of Teachers in the Development of Play Using Grasses and Flowers
in a Kindergarten Class for 4-year-olds

YOKOTA Saki, NISHIMURA (NAKAGAWA) Kana,
KATAYAMA Mika, TAKAHASHI Toshiyuki

2024

岡山大学教師教育開発センター紀要 第14号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.14, March 2024

原 著

幼稚園4歳児学級における草花を使った遊びの展開に見る 教師の役割

横田 咲樹※1 西村 (中川) 華那※2 片山 美香※3 高橋 敏之※3

本論は、幼稚園4歳児学級における草花を使った遊びにおいて、教師の役割を整理し、考察するものである。幼児教育では、遊びの展開に伴って、調和的で多様な学びが深化・発展し、遊びや学びは、幼児主体で偶発的に生じているように見える。しかし、遊びの展開や学びの背景には、「幼児の姿を予想した環境構成」「遊び方の変化に合わせた物的環境の整備」「遊びの発展への架け橋」といった教師の役割が見出された。

キーワード：幼稚園，4歳児学級，草花遊び，遊びの展開と学び，教師の役割

※1 社会福祉法人橘会 御南認定こども園

※2 元 岡山大学教育学部附属幼稚園

※3 岡山大学学術研究院教育学域 幼児教育講座

I 幼児の遊びや学びを支える教師の役割の描出

本研究は、幼稚園4歳児学級における草花遊びの事例から、遊びが引き出す学びや、それを支える教師の役割を描出するものである。幼児期の「草花遊び」に関する学術研究の動向を見るために、論文検索サイト CiNii で、検索欄の「タイトル」に「草花遊び」を入力すると（検索日：2023年11月28日）、1980～2023年の43年間に、9件の文献が該当した。

近年の先行研究を概観すると、第1に、佐藤・藤野（2012）は、「若い保育者の草花遊びと実践」を主題に、「横浜市内に勤務する若い保育者を対象として2010年5月（62名）と10月（57名）に草花遊びの研修会を開催し、実習した内容について、経験の有無・保育所での活用体験の有無・講習会の満足度についてアンケート調査を実施した。その結果、多くの保育者は草花遊びの重要性を感じているものの、体験が不足していることが分かった」と結論付けている⁽¹⁾。第2に、佐藤（2017）は、「保育者に必要な自然とのかかわり」を論考し、「自然を活用した教育を実践する力を養うため、まず基礎資料として草花あそびに使える家政大学キャンパス内の植物資源を調査し、活用の可能性について考察」すると共に、「実際に学生に遊びの一部を体験してもらい、より具体的な経験を積ませる試み」を実践した。その結果「学生は植物に対する基本的な知識やあそび体験が少ないことが浮き彫りになった」と報告している⁽²⁾。第3に、岡崎・深谷（2019）は、「保育内容「環境」における草花遊びの教育手法」において、発達心理学的な評価という観点から草花遊びの有用性を検証することに課題を設定し、保育施設25園に所属する保育者115名を対象に、草花遊びに関す

る実態調査を行った。保育現場における教育手法を分析した結果、「3・4・5歳児の年齢に関係なく草花遊びは比較的多く取り入れられており、おもちゃ遊び、飾り遊び、勝負遊びといった草花遊びの分類が多く認められたことを示すと共に、これらの草花遊びは、それぞれの年齢や発達、各園の実情に即した形で日常の保育に取り入れられていたことを明らかにした⁽³⁾。第4に、樋口（2021）は、保育者養成校で開講した授業の中で、草花遊びをテーマに、写真・名称・歴史等を調査してレポートを作成する課題を受講生に提示した。その結果、受講生26名のレポートから、32種類の草花遊びが確認できたと報告している。また、受講生のレポート内容から、草花遊びは、「身近にある草花を使った遊びであるので、手軽にいつでも作ることができそうではあるが、植物に関する知識や遊んだ経験がないと行うことが難しい遊びでもある」と纏め、「この授業を通して身近にある植物にも関心を持つとともに、草花遊びの経験を重ねていくことで、さらにその経験を子どもたちに伝えていくことができるようになる」と期待される教育効果を示した⁽⁴⁾。

以上の研究成果から、以下の知見が得られる。①保育者や保育者養成校の学生には、草花や草花遊びに関する経験及び知識が必要であること、②保育者は、草花遊びの重要性を感じていること、③草花遊びは、保育現場において3～5歳児の遊びに多く取り入れられていること、④草花の遊び方は、多岐に渡ること。先行研究概観の内容や、43年間に該当する研究からは、草花の保育教材としての重要性が読み取れると同時に、重要度に反して研究成果が僅少であることが確認できる。草花の多様な遊び方には、それぞれにどのような教育的意義があり、どのような教師の働きかけが求められるのかというようなことは、議論の余地がある。様々な視点や手法によって、研究の推進と蓄積が求められる。

そこで本研究では、草花が使用された1事例の保育実践を検討し、幼児の学びや遊びにおける教師の役割について考察する。第1報では、遊びの展開を整理し、生じた幼児の学びについて検討した⁽⁵⁾。その結果、遊びは、幼児の願望・意欲・発想・気付き等が契機となって展開し、学びは、遊びの展開に伴って深化・発展したことが示された。また、一連の遊びの中で生じた学びは、保育内容5領域全てに関連付けることができ、調和的で多様な様相が確認された。

続報である本論（第2報）では、遊びの展開や生じた学びの背景にある教師の役割を中心に論述する。研究手法としては、教師の実践時の内的過程を直接的・経時的に捕捉すると同時に、保育実践の意図と展開を時系列に沿って詳述する。そのことによって、保育実践に伴う教師の内的過程と対照させながら、実践に関わる教師としての意図や役割意識の解明に繋がると考える。教師の内的過程とは、幼児の実態の捕捉から、幼児の過去・現在・未来を考慮しながら、育てたい幼児の姿等を瞬時に総合的に判断し、実践に至るまでに教師が考えている内容のことである。研究の有用性として期待できるのは、保育実践として現れる外的な側面と教師の内的な側面の両面を照らし合わせながら、保育者の内と外で同時進行している保育者としての専門性を描出することによって、保育者としての有り様を明示することにある。保育者としての養成期にある学生

が「保育とは何か」と保育の専門性に関する初学習をする際の適切な教材と成り得ると考える。

II 草花を使った保育実践の概要

考察対象の幼児と遊びの説明は、第 1 報と重複するが、それらの記述が全くなければ、後続する分析や考察が、読者にとって理解しづらい論述になる。そこで、第 1 報の記述から必要な事項を論述する。また、遊びの全体像が分かるように表 1 を再掲する。

表 1. 「草花を使って遊ぶ」の遊びの様相 (2018 年 4 月下旬～6 月上旬)

遊びの展開	主な幼児の姿	草花の扱い	遊びの展開の契機となる幼児の内面	遊びに繋がる行動	環境構成
4 月第 3 週					
【1】草花を集める	○新しい環境を探索する。 ○庭の草花を集める。	集める	○草花を料理に用いるという発想を持つ。	①草花を使って遊ぶ。	○豊富な草花 ○ビニール袋
【2】草花を使って料理を作る	○草花を料理に用いる。 ○客役の店員として振舞う。	料理立て	○自らが料理を調理する。 ○料理の提供を希望する。	①草花を使って遊ぶ。 ②店員や客になりきってやり取りを楽しむ。 ③使った道具を元の場所に戻す。	○皿・スプーン・フォーク ○机・椅子 ※食器類は、ワゴンに種類別に分けて整理して置かれ、片付けやすい。
【3】料理に物を入れる	○コップに水を入れて料理に添える。 ○コップに草花を入れる。	水に浮かべる	○草花の色を水に浮かべたいという願望を持つ。	①草花を使って遊ぶ。 ②店員と客になりきってやり取りを楽しむ。 ③使った道具を元の場所に戻す。 ④繰り返し試す。 ⑤発見や発想を教師や友達に伝える。 ⑥友達の発言を聞き、友達の遊び方を見る。	○コップ ※5歳児学級の幼児が草花を使った遊びが水遊びに見える。
5 月第 1 週					
【4】草花の色水を作る	○エプロンをはき、店員になりきってコップの中に入れて混ぜる。 ○水と草花の色を混ぜる。 ○水と草花の色を混ぜる。	[1] 混ぜる 混ぜる	○草花の色を水に混ぜる。 ○水と草花の色を混ぜる。	①草花を使って遊ぶ。 ②店員と客になりきってやり取りを楽しむ。 ③使った道具を元の場所に戻す。 ④繰り返し試す。 ⑤発見や発想を教師や友達に伝える。 ⑥友達の発言を聞き、友達の遊び方を見る。 ⑦友達に色水の作り方を尋ねる。 ⑧適切な水の量を考慮して色水を作る。 ⑨作り終わった色水を捨てる。 ⑩水に色を付けたいという願望を実現する。 ⑪草花を浮かべるより、混ぜる・揉む・握る方が、水に色が付くことに気が付く。	○作業台 ○エプロン ○透明な容器 ○鍋 ○お玉 ○計量スプーン ○水槽 ○使った容器を張った洗剤(タライ) ○作り終わった色水を捨てるバケツ ○色水を並べる箱
	○コップの中に入れて混ぜる。 ○水と草花の色を混ぜる。			[2] 道具を使って押す	○草花の色を水に混ぜる。 ○水と草花の色を混ぜる。

Ⅲ 教師の役割の分析

遊びの展開に影響を与えたと考えられる教師の役割と、それに必要な教師の資質・能力を考察してみよう。「草花を使って遊ぶ」の遊びの展開に寄与した役割として、主要であったのは、「幼児の姿を予想した環境構成」「遊び方の変化に合わせた物的環境の整備」「遊びの発展への架け橋」であった。「事例」としているのは、特定日時の幼児の活動を、録音や録画によって克明・精密に再現したものではなく、教師の保育実践記録の中から、典型的な保育の展開を抽出して記述したものである。

1 幼児の姿を予想した環境構成

幼児の姿を予想した環境構成とは、物的環境の一つ一つが誘発する幼児の行動を予測し、学びに繋がるように配慮することである。配慮事項には、物の性質と配置の仕方がある。環境を構成している全てのものに教師の意図があり、様々な幼児の行動を誘引しているが、幼児の学びに深く影響した物を3つ挙げて考察する。

(1) 底が深い容器

底が深い容器は、幼児が遊びの中で水を使いたいと思うようになることを予想して用意されたものである。底が深い容器が環境に加えられたのは、草花で作った料理に飲み物が添えられ始めた頃であった。遊びの初期では、水を入れることができる容器はコップだけだったが、幼児の姿に合わせてスープ皿や鍋等が徐々に増やされ、平たい皿は減らされた。「草花を集める」段階から「色水を作る」段階に遊びが変化したのは、見立て遊びやごっこ遊びといった先行体験の影響や5歳児学級の幼児の色水遊びをする姿が見えたことも挙げられるが、環境構成という観点では、底が深い容器が水を使って遊ぶという発想を引き出したり、水を使って遊びたいという願望を叶えたりしたと考えられる。つまり、底が深い容器は、水を使って遊ぶことの契機となり、草花を使って色水を作ることができるという気付きを促したと考えられる。

遊びにおける水の使用は、表1の「学びに繋がる行動」に示したもののうち、②と④～⑯に関連する。水を使うことがこの遊びの始まりであるため、「学びに繋がる行動」に挙げたほぼ全てのものに関連している。底が深く水を入れられる容器があったことで、これまで経験してきた草花を見立てて遊ぶことに留まらず、どうすれば自分が作りたい飲み物を作ることができるか、より実物らしいジュースを作るにはどうすれば良いか等考え、試行錯誤を繰り返しながら遊ぶ姿を引き出すことができたかと推察できる。

「草花を使って遊ぶ」の中で水を使うことは、様々な学びを引き出すことに繋がっており、水を使いたいと思わせる教師の働きかけの有効性が確認できる。教師は、幼児の姿から願望を読み取り、その願望の実現に必要な環境を構成することで、幼児が自分たちで遊びを作り出していけるようにすることが大切であると考える。

（2）色水を並べる白い箱

幼児が作った色水は、透明のカップやペットボトルに入れられ、図4で示したように牛乳パックで作られた箱に数個ずつ並べられた。この箱には、白いこと、複数の容器が並べられる大きさであること、幼児一人一人の名前が書かれていること、という特徴がある。



図4. 色水を並べる白い箱

白い箱にすることで、色水を入れて容器の背面が白であるため、できた色水の僅かな色の変化に気付きやすかったり、水に色が付いた満足感を感じたりすることができる。そのため、幼児は濃い色と薄い色や、濁った色と濁っていない色を見比べる等、色の違いに気付きながら遊ぶようになった。自分が作った色水を飾ることができる場所があることで、幼児は作った満足感や達成感を感じることができた。また、できた色水を教師や友達に見てもらったり、認められたりすることで、自信を持つことに繋がった。この満足感や自信が、幼児の「またやってみたい」という思いを引き出し、さらなる意欲や試行錯誤しながら遊ぶ姿を引き出した。また、周りの幼児にとっても、友達が作った色水に興味を持つきっかけとなり得るため、色水を並べておく場所は、幼児の視界に入りやすい向きや位置にすることが重要である。そのため、動線や遊びの姿を予想しながら環境構成しつつ、幼児の姿に合わせて日々環境を変えていくことが求められる。

色に注目できる環境を整えたことは、表1の「学びに繋がる行動」の中で、④～⑧、⑩～⑰を引き出した。その中では特に、色の違いに気付き、「こんな色作ってみたい」「こうしたらどうなるだろう？」と、自分なりに考えを巡らせながら試行錯誤する姿が、幼児の学びとして重要である。教師は、遊びの中で幼児に気付いて欲しいことや経験して欲しいことを踏まえ、その姿が引き出される環境を考えていくことが大切である。

（3）水槽と計量スプーン

幼児が色水を作る際に、必要な量の水を容器に移せるようにするために、色水を作る作業台の上に水槽が用意され、その傍に計量スプーンが置かれた。幼児は、水槽から水を移す回数を数えながら色水を作っていた。友達にも「〇回水入れたらできたよ」と伝える姿が見られた。水槽と計量スプーンは、水の量を意識した色水作りを誘発したと言えよう。

水槽と計量スプーンの使用は、草花を使った色水遊びの先行経験がない4歳児の発達過程が考慮されている。5歳児学級の色水遊びの場所には、薬缶（やかん）が置かれていた。草花を使った色水遊びの先行経験がない4歳児学級の幼児は、薬缶で水を入れると、水の量を調節しにくく、花卉をつぶしてもすぐに色の変化が見られにくくなるほど水が多くなることも予想される。幼児が試

行錯誤しながら遊ぶようになるには、まずは成功体験が必要であり、4歳児学級の幼児にとって簡単すぎず難しすぎないものである必要がある。そうすることで、考えたことを試したり、うまくいかなくても諦めずに最後までやり遂げようとしたりする姿が引き出される。

水槽と計量スプーンが引き出した幼児の行動を、表1の「学びに繋がる行動」に対応させながら、主なものを挙げてみると、④～⑧、⑩、⑫～⑰であると考えられる。水槽と計量スプーンは、水の量に関する気付きを引き出すと同時に、活動の継続や発展を支えたと考えられる。教師は、幼児の実態から発達段階にあった環境を用意することが求められる。

2 遊び方の変化に合わせた物的環境の整備

遊び方の変化に合わせた物的環境の整備とは、環境構成を未完成にしておくことを意味する。環境や遊びが、完全に出来上がった状態で一方的に提供されてしまうと、その中で遊ぶことに満足してしまい、主体的な学びや新たな意欲に繋がりにくい可能性がある。教師は、幼児の内的成長に合わせて物的環境を変化させていく必要がある。変化とは、物品を加えたり減らしたりすると同時に、位置を調整することである。例えば、「幼児の姿を予想した環境構成」の中で論じた物的環境も、遊びの最初から準備されていると、十分な教育的効果は得られない。幼児の遊び方や願望や気付きに合わせて、適切な位置を探りながら、遊びの場に置く必要がある。

事例1は、表1の展開【4】における「道具を使って押し潰す」段階の姿である。濃い色の色水を作ることが可能になり始めた幼児は、より濃い色を出し、実物のジュースのような色水を作りたいという願望を持った。この願望の下、色水作りを繰り返すうちに、幼児は、花弁を力強く押し潰すだけでなく、押し付ける面に凹凸があった方が、効率よく色を出せることに気付いていった。それは、図5に示すように、鍋と箸（ざる）で簡易なすり鉢状のものを作っていたことから読み取れる。



図5. すり鉢に近いイメージで鍋と箸を使う幼児

事例1：幼児Aは、鍋に水を入れ、その上に箸を置き、花弁をすりこぎで押し潰していた。幼児Aは、「こうやってゴリゴリしたら色が出るんだよ」と教師に伝えた。教師は、その言葉を受け、「ゴリゴリしたら色が出るんだね。じゃあ、こんなのがあるけど、これならゴリゴリもっとできるかな？」と言って、幼児Aにすり鉢を差し出した。幼児Aは、すり鉢を受け取り、色水作りを続けた。

教師は、幼児がすり鉢に近いイメージを持ち、体や道具を使っている姿を見た直後に、幼児にすり鉢を差し出した。これは、幼児にとってすり鉢の価値が最も高まった時機を見定めて幼児に差し出したということである。例えば、す

りこぎやすり鉢を、展開【3】の段階で環境に出していたとしても、すり鉢は皿の用途で使われ、水を入れて草花を浮かべることが予想できる。幼児が草花を「すり潰す」という発想を持った時に、その発想を実現させることができるすり鉢を手渡すことは、試行錯誤によって願望を実現させる面白さを感じたり、自信を持ったりすると共に、次の活動への意欲を持つことになる。

3 遊びの発展への架け橋

遊びの発展への架け橋とは、幼児が意欲的に遊びに取り組んだり、遊びの中で願望を持ったりできるように、援助することである。第1報では、遊びの展開が学びの深化・発展を引き起こすことを考察した。遊びの展開には、遊びに対する願望・意欲・発想・気付き等を継続して持つことが必要であるが、それらは、幼児が自力で行うことが難しい場合がある。例えば、遊びが単発的に終わってしまう場合として想定されるのは、遊びにおける願望が実現して幼児が満足し、新たな意欲が生じない状況である。その逆の場合もあり、なかなか願望が実現されないと、飽きたり諦めたりして、活動への興味が失われる時がある。

この項目では、幼児が、意欲や願望を持ち続ける刺激となった「共感的態度と受容的理解」「試行錯誤への誘い」「遊びの振り返り」について考察する。

(1) 共感的態度と受容的理解

共感的態度と受容的理解の教育的効果について、3項目に分けて考察してみよう。第1に、幼児の行動の承認と奨励である。自分が作ったジュースや料理を教師に食べてもらうことや、色水作りの最中の発見の喜びが共感されることは満足感に繋がり、繰り返し取り組む意欲になる。「草花を使って遊ぶ」において、草花集めから料理作りまでは、3歳児学級の時の自然物を使ったままごと遊びやレストランごっこ等の先行体験に基づいた幼児の自発的な行動であると考えられる。一方で、料理作りから色水作りまで遊びが展開したのは、教師からの承認と奨励によって自分の行動や考えに自信を持ち、活動への意欲が高まったことが大きく影響している。第2に、幼児の学びの自覚である。幼児は学びの深化・発展において重要な気付きを得ていても、無自覚である場合がある。幼児の内面や言動を言葉掛けによって共感することで、無自覚な学びが意識化され、遊びや学びの深化・発展に繋がる。この際、幼児の工夫や意図を読み取った具体的な言葉掛けをすることが重要である。第3に、一部の幼児の気付きや学びの広がりである。幼児は、信頼関係のある教師の言動を意識しやすい。つまり教師が周りの幼児にも聞こえるように、幼児の内面や行動をについて共感や受容をすることで、周囲の幼児が考えたり気付いたりするきっかけにもなり得る。そのため、一部の幼児の気付きや学びを全体に広めることで、周りの幼児の気付きに繋がると共に、新たな考えや発想が生まれることにも繋がるため、教師の言葉掛けの仕方が遊びの展開に直結すると言える。

事例 2：様々な色の草花が混在した状態で色水を作り、その色は、濁って黒色に近い色水を作る幼児が多い中、幼児 B は、黄色の花弁だけを使い、黄色っぽい色水を作っていた。幼児 B は、「僕のは、レモンジュース。黄色いでしょ」と教師に伝えた。教師は、「本当だ。黄色のレモンジュース美味しそうだね」と、黄色の色水ができた喜びに共感した。すると、周囲にいた幼児が、「レモンジュースの色だー！」「どうやって作ったの？」と、幼児 B の色水に興味を示した。

事例 2 の「本当だ。黄色のレモンジュース美味しそうだね！」という教師の発言は、幼児の願望と実現への工夫を把握した上での言葉掛けである。幼児の願望とは、実物のようなジュースを作りたいという心情のことであり、それに対する工夫とは、黄色の花弁だけを使って色水を作ったことである。自分で考えて試したことが教師に認められたことによって、より本物らしいジュースができた喜びと満足感から、他のか花弁の色でも試してみたり、か花弁の色を考えながら色水を作ったりしようとする姿につながったと推察される。また、教師の言葉は、周囲の幼児が幼児 B の色水に興味を向ける契機になり、使用する花弁の色を選別する色水の作り方が広まった。教師の言葉掛けが、遊びの展開に影響したと指摘できる。

(2) 試行錯誤への誘い

試行錯誤への誘いとは、学びや気づきを現在進行形で理解し、幼児の発想を起点として、集団の一員として試行錯誤しながら遊びに参加することである。教師は、論理的思考の下に、問い掛けによって幼児間で共通の課題や問題点を明確にしたり、幼児の言動から共振性の高い気づきや発想を取り上げたりする必要がある。この教師の働きかけによって、幼児は、遊びに対する継続的な興味関心を持ち続け、遊びに関わる幼児の全体的な願望や発想を把握しながら、遊びを発展させることができる。

教師は、共通性・共振性の高い幼児の内面や言動を取り上げるが、注目すべきは、共通性・共振性の高さは、必ずしも幼児の願望及び発想の実現性の高さではないことである。大人の視点から判断すると明らかに失敗しそうな方法でも、幼児を励ましながら共に試行することで、新たな気づきや考えを引き出し、学びの深化・発展において重要な機会になると言えよう。一方で、幼児が願望を持っていても、それがなかなか実現されないと、活動への意欲は継続されにくい。教師と一緒に試行錯誤しながら、幼児の考えを整理したり、気づきを促したりすることで、実現に向かえるようにすることが重要である。

試行錯誤への誘いによって期待される幼児の姿は、遊びによって様々であるが、広く共通するものを 3 点挙げる。第 1 に、幼児が自分で考え、自分の考えを自分なりに言葉で表現することである。第 2 に、友達の話聞いて考えたり気付いたりすることである。第 3 に、活動への意欲が増進して、試行錯誤をすることである。自分たちの力で願望や発想を実現できたという実感は、達成感や満足感になり、新しい発想や意欲に繋がる。以上の 3 点は、周囲の環境に興味関心を持って取り組む「主体的な学び」、自分の思いや考えを表現したり、友

達の考えを聞いたりしながら考えを広げて深める「対話的な学び」、対象と関わりながら見方・考え方を変化させ、幼児なりのやり方やペースで試行錯誤を繰り返す「深い学び」との関連性が読み取れる。試行錯誤への誘いは、アクティブラーニングの観点からも有効である。

事例3：4歳児学級の保育室の隣に、5歳児学級の保育室があり、5歳児学級の幼児も保育室の前のテラスで、店ごっこをしていた。5歳児学級の店ごっこの場には、窓枠があった。それを見た幼児Cは、教師に「先生！ここに棒作って窓がある！」と言った。教師が「どうやって作る？」と尋ねると、幼児Dは「長い棒がいる」と答えた。幼児らは、教師と一緒に牛乳パックを次々に繋ぎ、大きな窓枠が完成した。

事例3は、表1の展開【4】における、「道具を使って押し潰す」段階の姿である。花卉の色によって、違う色の色水ができることに気付いた幼児は、様々な色水を作り、色を味に見立てて遊ぶようになる。その中で、5歳児学級の幼児が店ごっこで使っているような、窓枠付きのカウンターでジュースを売りたいと発案された。教師は、幼児Cの提案に対して「どうやって作る？」と言葉を返し、幼児自身が考えるように援助した。幼児はかいたりつくったりして遊ぶ場に、種類ごとに分けて置いてある廃材の中から、窓枠になりそうな長い棒を探し、牛乳パックを使うことを思いついた。たくさん繋いで長い棒状にしたいという思いが出た時に、教師がたくさんの牛乳パックを持ってくると、幼児は牛乳パックを何で繋ぐかを考え、幼児の先行体験の中で最も強力かつ即時に接着できるガムテープの使用が採用された。幼児は、店の窓枠として適当な長さを相談しながら、協力して図6に示す窓枠の設置を完了した。



図6. ジュース屋さんの窓枠

牛乳パックは、手に入れやすく、活用の自由度が高いものであり、幼児が自分で扱いやすい素材であることから、幼児から何か思いが生じた時にすぐに実現できるようにと、事前にたくさん用意していた。牛乳パックは、扱いやすく、加工もしやすいため、幼児が長さや高さを自由に調節し、友達と協力しながら制作できる材料であり、幼児の思いを具現化するのに適していたと考える。

以上に論述した遊びの様相において、「相談」「協力」という用語を使って説明したが、4歳児学級の幼児の発達過程では、「相談」や「協力」しながら遊びを成立させるためには、教師が、幼児の内面や言動を取り上げ、遊びに対する興味関心や意欲や発想等を、時空間と幼児間に繋ぐ必要がある。

（3）遊びの振り返り

1日の保育の終わりでは、その日の出来事を振り返る時間が設けられた。振り返りは、教師の周りに幼児が集まり、教師や友達に知らせたいことを、学級全体に向けて発表する形式で行われた。振り返りの時間に、幼児の姿をどのよ

うに取り上げるかは、遊びの展開や学びの深化・発展に大きく影響する。例えば、「草花を使って遊ぶ」においては、色に注目して遊ぶ幼児の姿が取り上げられた。具体的には、図 4 の色水を並べる白い箱に、色水を作った容器を入れ、それを見せながら幼児が自分の言葉で話し、教師がそれに対して言葉を補ったり質問したりして言葉を引き出ししながら、学級の幼児に伝えられた。自分が作った色水を友達に見せたり、友達から認められたりすることは、幼児の満足感や自信に繋がった。また、白い箱が持ち運び可能な大きさで、実際に実物を見せながら紹介できるようにしてあると共に、色水の背景色が白いため、色に注目して話を聞きやすくなり、友達が作った色水の色に強い関心を持った。色への注目は、これまで考察してきたように、多様な学びに深く関連している。「遊びの振り返り」は、遊びの展開と学びの深化・発展に資することが明白である。

また、関わっていない遊びに興味を持つ機会となるため、幼児の活動の幅を広げることにつながった。さらに、友達の色水や作り方の工夫を見ることは、「友達のよさ」に気付き、興味関心を持つ契機となった。友達が行っている遊びに興味関心を持ち、他の幼児の考えに触れることは、遊びが発展しやすい学級の雰囲気形成することになる。遊びが発展しやすい雰囲気とは、幼児が 1 つの願望の実現に満足せずさらに願望を持ったり、疑問を持って自分で考えたり、思い付いたことを試してみたりしながら、意欲的に遊び続ける姿が引き出されやすい雰囲気のことである。

4 教師の役割を果たすために必要な資質能力

これまで挙げた教師の重要な役割である「幼児の姿を予想した環境構成」「遊び方の変化に合わせた物的環境の整備」「遊びの発展への架け橋」において、全ての基盤となる教師の力量形成及び資質能力を 2 点挙げる。1 点目は、幼児の内面を読み取る力である。幼児は遊びの中で、「何を」楽しみ、「何に」気付いているのか、的確かつ瞬時に読み取り、効果的な働きかけに繋ぐことが重要である。幼児の内面を読み取るために必要な視点を、具体的に考察してみよう。

「草花を使って遊ぶ」において、教師は、「前日の遊び方との違い」「作る色水の状態」「呟きや発言」に注目した。「前日の遊び方との違い」の具体例として、展開【4】で作ったジュース(草花を浮かべた水)を覗き込む姿がある。前日までは、草花を水に浮かべ、混ぜた後すぐに提供していたが、翌日は、しっかり混ぜて、水に色が付いたことを確認してからジュースを提供した。これは、幼児が草花を使って水に色が付くことに気付き、それを楽しんでいることを意味している。

「作る色水の状態」の変化も重要な手がかりである。展開【3】で見られた草花が浮き、濁った状態の色水からは、草花を使って水に色が付くことを楽しんでた。展開【4】の終盤で見られた、色相が明確に判別できる色水からは、作った色を味に見立てると共に、作りたい色をイメージして作ることを楽しんでいた。遊びの結果でき上がるものの状態の変化は、幼児にとってその遊びの何が楽しいのかを表す。また、「呟きや発言の変化」の具体例として、前述した色

を出す方法を表現した幼児の言葉を挙げる。言葉は、「マゼマゼ」「ギュッギュッ」「ゴリゴリ」という様に変化した。草花の性質や力の使い方に対する理解は、本来、視覚的に確認が困難であるが、これらの言語情報は、幼児がどのようなことに気付いているのかを理解する手掛かりになる。

2点目は、幼児の興味関心や遊びの展開を予測する能力である。教師は、具体的に保育を立案するため、月と週の指導計画をもとに「遊びの保育構想図」を立てた。保育構想図とは、幼児の先行体験及び幼児の興味関心等を踏まえ、遊びの展開の大筋を予測したものである。時系列に沿って遊びの展開が図示され、そこに、幼児の姿や教師の援助や環境構成が書き込まれる。保育実践は、日々の保育の振り返りを元に、幼児の姿に合わせて構想図を何度も再構築し、日案に反映しながら行われる。構想図を立案及び再構築する際に重要なのは、幼児の姿と必要な教師の役割を具体的に想定することである。遊びを通して期待される学びと、その学びを得ている幼児の姿を明確にした上で、保育中の幼児の姿を観察することで、時宜を得た教師の働きかけが可能になる。そのためには、前述した「何を」楽しみ、「何に」気付いているのかを考える必要がある。以上のことは、保育経験の蓄積を要する。特に、予測と実際が異なった保育経験が、教師の力量形成において重要である。予測と実際が異なるのは、幼児の内面の読み取りや教師の働きかけが、適切でなかった場合であり、保育の省察によって教師が自身の課題を具体的に知ることになる。

IV 幼児教育における学びの特徴

1 幼児の学びの捕捉や評価の困難性

第1報では、遊びの展開に伴って生じた学びを考察する中で、「体や道具の使い方」の上達や「草花の性質に対する学び」の深化に言及した。草花を浮かべて遊ぶ状態から、様々な色の色水を作り、店ごっこをして遊ぶ状態へ変化したことは、可視的で分かりやすい幼児の変化である。ここで、幼児の学びを捕捉し評価する時の留意点は、幼児期における重要な学びは、上手に色水が作れるようになったことや、店ごっこが発展したという結果ではなく、そこに至るまでの過程にある。つまり、幼児教育において大切にされる学びや成長は、考えたり、何度も試したり、友達の姿を見たり聞いたりして自分の行動に反映させたり、満足感や達成感を感じて、挑戦する意欲を持ったりするといった、意欲・関心・態度である。幼児教育において、結果ではなく、過程が大切であると言われるのは、全ての過程に「学びに向かう力」⁽⁶⁾が育まれる場面があるからであり、「学びに向かう力」を丁寧育てることが、人格の基盤形成になる。

これまで述べてきた通り、幼児教育において、幼児の育ちの評価を「できる」「できない」の範疇で行うことは不適切な場合がある。また、幼児の学びを引き出す教育方法や保育教材も様々である。したがって、学びが他校種の人には伝わりにくかったり、求められる教師の役割が、教師個人の資質や経験で語られたり、遊びの展開や学びの構造を理論的に述べるのが難しかったりする側

面がある。

2 遊びの展開と幼児の学びの関連性

「Ⅲ 教師の役割の分析」では、遊びの展開を促進したと考えられる教師の役割に焦点を当て、どのような幼児の学びを引き出したかということを検討した。表1でも確認できるように、遊びの展開は、より多くの「学びに繋がる行動」を引き出し、教師が育てたい幼児の姿を出現させることになる。

第1報では、遊びの展開は、幼児の願望・意欲・発想・気付き等が契機となると述べた。言い換えると、遊びが展開するためには、幼児が主体的・意欲的に活動していることが必要である。

「学びに向かう力」は、幼児が遊びを作り出す中で、育まれるものである。遊びを作り出す過程には、身近な環境に主体的に関わり、自分のしたいことを思い付く、したいことを実現させるために、考えたり工夫したり新たな発想を持ったりしながら、追求してやり遂げようとする、といった幼児の姿が生じる。やり遂げようとする過程には、思い通りに出来なかったり、どうしたら良いか分からず迷ったりすることもあるが、考えを巡らせながら最後までやり遂げることで満足感や自信に繋がる。教師は、自発的な幼児の姿を捉え、まずはその遊びで何が楽しいのかを知り、教材研究した上で、幼児に何を経験して欲しいかや育てたい力を考え、その力が育まれるように導いていく専門性が求められる。

V 今後の課題

「草花を使って遊ぶ」の活動では、遊びの展開に大きく寄与した教師の役割として、「幼児の姿を予想した環境構成」「遊び方の変化に合わせた物的環境の整備」「遊びの発展への架け橋」が見出された。しかし、この研究成果は、4歳児学級において行われた1つの遊びの分析結果に過ぎない。保育教材や教育場面は無数にあるため、様々な遊びや発達過程を対象に、研究成果を蓄積することが求められる。また、同時進行で展開する複数の遊びを対象にした調査研究が望まれる。

参考・引用文献

- (1) 佐藤英文・藤野耕平「若い保育者の草花遊びと実践」『鶴見大学紀要. 第3部, 保育・歯科衛生編』, 第49号, 鶴見大学, 17-26頁, 2012年.
- (2) 佐藤英文「保育者に必要な自然とのかかわり そのI. 東京家政大学キャンパスにおける植物資源を使った草花遊びの可能性」『東京家政大学教員養成教育推進室年報』, 第4号, 東京家政大学教員養成教育推進室, 23-28頁, 2017年.
- (3) 岡崎善治・深谷博子「保育内容「環境」における草花遊びの教育手法— 発達心理学的な評価を通して—」『中京学院大学短期大学部研究紀要』, 第50巻第

1号, 中京学院大学短期大学部, 47-55頁, 2019年.

(4) 樋口一成「保育における遊びの継承に関する考察と試み—日本の郷土玩具・伝承遊び・草花遊び—」『愛知教育大学幼児教育研究』, 第21号, 愛知教育大学幼児教育講座, 47-56頁, 2021年.

(5) 横田咲樹・西村(中川)華那・高橋敏之「幼稚園4歳児学級における草花を使った遊びの展開に見る幼児の多様な学び」『岡山大学教師教育開発センター紀要』, 第13号, 岡山大学教師教育開発センター, 327-339頁, 2023年.

(6) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』, フレーベル館, 50頁, 2018年.

The Role of Teachers in the Development of Play Using Grasses and Flowers in a Kindergarten Class for 4-year-olds

YOKOTA Saki^{*1}, NISHIMURA(NAKAGAWA) Kana^{*2}, KATAYAMA Mika^{*3}, TAKAHASHI Toshiyuki^{*3}

This paper aims to organize and examine the role of teachers in the play using grasses and flowers in a kindergarten class for 4-year-olds. In early childhood education, harmonious and diverse learning deepens and develops alongside the development of play, with play and learning seemingly occurring spontaneously and child-directed. However, the roles of teachers, such as “environmental constitution anticipating the child's presence,” “maintenance of the physical environment in accordance with changes in play,” and “bridging to the development of play,” were identified as underlying the background of the development of play and learning.

Keywords : kindergarten, 4-year-old class, play using grasses and flowers, development of play and learning, teacher's role

*1 Minan Certified Child Center

*2 Former The Kindergarten Attached to the Faculty of Education, Okayama University

*3 Faculty of Education, Okayama University
